
V S

F

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VS

【Zマーク】

Z7292D

【作者名】

F

【あらすじ】

「好きです！」 「嫌いです」

少年少女の愛の攻防戦 と、それを見守る人びとの話。

彼の想いとその情熱

「好きです！」

「嫌いです」

こんにちは、僕は鴨居浩太郎カモイコウタロウって言っています。

今のは…お恥ずかしながら、愛する先輩に直球で告白し見事に玉砕した場面です。

通算24回目。

初めて告白したのが入学後少し経つたときですから、そろそろ5月の半ば…ああ初夏にさしかかろうとしていますね。

あ、その先輩のことを言いたい忘れてました。いけないいけない。

先輩の名は春日井奈々カスガイナナ（ナナ）。僕より1つ上の2年生です。

とつつても可愛らしい名前でしょう？

その容姿は見るものを虜にし、目が合った瞬間如蝶状態のようになること間違いなしってくらいの和風美人さんです。

右耳の側にある泣き黒子、腰まで流れるように整った真っ直ぐな髪、か細い印象を受けるけれど、実は結構背が高くて凛としている、などなど。

先輩の魅力はまだ沢山あるのですが、これ以上言い続けると終わりそうにないのでこの辺で。

とにかく、ものすごく素敵な方です。

こんな風に言つてますが、実は僕、入学当時は先輩のこと、少し苦手だったのです。

とっても美人さんなのですが、その周りに漂う雰囲気が、少し恐くて。

入学当時、学校のことを教えてくれた先輩からにも遠まわしに近づかない方がいいよ、と言わされたこともあって、僕の中では近寄りがたい存在だったんです。

それが変わったのは。

僕と先輩が同じ図書委員での仕事を任されたときでした。

そのとき僕は…自分で言つて情けないのですが、ビビつてました。ものすごいべ。

図書委員の仕事は主に書棚整理とカウンターの受付。

書棚整理はそれぞれの持ち場を与えられて個々に活動するのですが、カウンター当番となると、その、隣同士に座つて作業をするんですね。効率がいいだとか。単に場所が狭いせいだと思いますが。

僕は非常にあせつてました。

とても綺麗な方だけど何考えてるのかよくわかんない、そんな風に先輩のことを思つていたのですから。

だから、そのときの僕はすぐ拳動不審だつたんだと思います。

時々発せられる言葉にビクッとしたり言葉遣いが変だつたり、視線を合わせないようになつたり。

でも、一緒に作業しているうちに気づいたんです。

ビクビクオロオロしている僕に対し、幾度となく話しかけてくれ、僕の反応が悪くても気にせず、それどころか、まだ慣れない仕事に戸惑っている僕のためにさりげなくフォローを入れてくれて。それに気がついたとき、思わず泣きそうになりました。

少なくとも、僕は、先輩に対して決して良い反応をしてないのに、先輩はそのことに気づいてるはずなのに、それでも先輩は見て見ぬふりをして僕を気遣ってくれた。

それなのに、周りの反応と第一印象のせいで先輩のことをあまり良く思っていない自分自身が本当に情けなく思つたんです。

不思議なことに気づいた途端先輩のことが段々見えてきたのです。時々発せられる言葉は一言ずつだけ、よく考えてみればその内容は的確で仕事のやり方がわからない僕のためにわかりやすく言ってもらつてているということ。

話す必要があれば話すし、必要でないならば話さない。

先輩は…ただ当たり前のことをしているのであって、決して怖い行動をしてるわけでは、ない。

話す頻度だつて人それぞれだし、先輩はきっと、ただ話すことが少ない人なのではないでしょうか。

そんな風に思うことはすぐ傲慢で不羨だけど、それでも、少なくとも先輩は眞が言つているような冷たい人じやない。

とても優しい人なんだ。

そう思つてゐるうちに、何だか、顔や耳が熱くなつてきて…。恋に、落ちてしまつたのです。

恋と自覚したのが先輩とカウンター当番をしている時だつたから、余計に顔を見られるのが恥ずかしくて。

表情は変わつていないうに見えて、でもさりげなく僕の様子を察してくれてる先輩。

それも分かると余計顔が熱くなつてきちゃつて。もひ、心臓バクバク、隣に先輩がいるつて改めて思つただけで余計にし、心臓の音が…。

なんてそんな僕の感情はいいのでした。
とにかく、そんなことがあって、先輩への見方が変わり、そして恋
してしまったのです。

こんな感情になつたのは初めてで、でも恋したということには間違
いなくて、もうどうしようもなかつたのですが少しでも先輩と仲良
くなれるように、が、頑張つて下の名前で呼ぶようにしました。
それを聞いたときの先輩が苦笑するのは忘れません。

先輩の笑顔つて貴重なんです。めちゃくちゃ可愛いのです。

好きになつてから気づいたことですが、先輩は図書担当番以外でも図
書館にいます。

ちょうど、夕方辺りで人がいなくて静かなとき。

僕もよく放課後本を読むし、先輩といたいという欲もあつたため、
ある日隣で本を読ませてもらおうと思つて声をかけたら怒られまし
た。怒鳴られ、涙ぐみました。

：先輩、そんなに本読む邪魔が嫌いなんですか？

先輩、少女漫画とかも読むんだなーと思いながら迎えた夜。

このままでは、毎週1回の委員会の仕事でしか先輩に会えない。

この時既に僕は先輩と毎日いたい衝動に駆られてました。

会いたい会いたい会いたい。

それに、先輩は少し恐れられてるみたいだけど、絶対影じや人気の
はずだ。

こんな所で躊躇していたら誰かに攢われてしまつ！

そう思つて、翌日、告白する決心をしたのです。

：まあ、結果は無残なものでしたが。

そして、

ご覧の通り、24回告白し24回ともバツサリ斬られている僕。普通なら1回2回で容赦なく断られたら可能性も何も無くあきらめるかもしれません。

その方が、告白する側にとっては傷は浅く済むのですから。しつこい男つて嫌われそうですし。

それでも、僕はあきらめきれないのです。

どんなに手酷く振られても嫌いになれず、むしろどんどん好きになつていくばかり。

それに、まだ告白したりな「くら」いです。
それに。

先輩は僕の嫌な態度にもめげずに話してくれた。
だから、僕もめげずに想いを伝えようと決めてるんです。

先輩が恋愛対象として見てもらえるのはかなり低い確率ですが…（
僕ちつちやいし）。

それでもいつか、先輩が僕の想いに応えてくれる日を願いつつ、僕は明日も挑戦しようと思います。

「好きです！」

「嫌いです」

何なんだ何なんだ何なんだ！

どうしてこんなことになってしまったのだろう。

私の名前は春日井奈々（なな）。

皆にクールと思われているらしい、じく普通の一般女子高校生である。

今の場面は…ありていに言えば、私が告白されそれを斬つて捨てた場面だ。

しかしこのやりとり…数えただけでも20回は越えている。しかも全部同じ人で、だ。おまけにほぼ毎日。

しかも相手は学校では知らずと言われている奴だ。

色素が薄く、淡い茶色めいた髪の毛。透き通ったような白い肌とその身体、そして容姿は天使のように優らしく美しい。さらに性格はおとなしめで優しいとの評判だ。

だから通称『天使くん』と名付けられ、私たち2年や3年の間では爆発的に人気を集めているらしい。

そんな奴が、どうして私に毎回アタックし続けているのか。

そもそも、知り合いも少なく静かにこつそりと学校生活を送っていたこの私になのか。

そして、どうして私はこんなにも毎回手酷く振ってしまうのか。

私だつて振るのは嫌なんだ。

毎回言われるのは公衆の面前でだし、終わつたあとは人々の視線（特に女子の）が本当に痛いし。

でも、ちゃんとしたワケがあるのだ。

コトは、私と奴が同じ図書委員になつた時から始まつたのかもしない。

私と彼が同じカウンター当番に当たつた最初の仕事日。当初、彼は傍から見ても、ものすこ――くわかりやすいほど拳動不審だった。

入学したての1年生、ワケも分からぬまま当番に回されたのだろう。（ここ）の委員会は一部の犠牲者がローテーションで当番になることで全員やらずに済むのだ。一番仕事多いしな。（しかも隣に上級生がいる）この状態。緊張しているのも無理はないと思ったが、図書委員のスペシャリストとしての誇りをかけて、彼に徹底的な指導をしようとあの手この手で彼に接しようとした。ところは建前で。

私自身彼に興味を持つていたのでひょいこ機会だと思ったのが事実。

私は可愛いものが大好きだ。愛読書は少女小説。趣味は編み物や料理など。沢山のウサギやクマのぬいぐるみに囲われて寝るのが大好きなくらい可愛らしいものには目がない。（何故かクールな印象を持たれているらしいし、それを否定するのも自分の趣味を明かすのも恥ずかしいため、秘密にしているが。）

そんな私が、『天使くん』と同じ仕事に就いてしまった。

これはもう神が私と彼が仲良くなれと言つているとしか思えないと言つわけで行動を起こしたのだ。

実際見てみると噂に違わず可愛らしい容姿をしているのに驚き、隣に座っている女の私が惨めに思ったものだ。

しかし、段々と打ち解けてくれたのか少しづつ話し出してくれた天使くん。

普段あまり喋らない私だが、必死に話しかけた努力が報われたような気がしたものだ。

それに、いつのまにか下の名前で呼ぶようになつてくれた。可愛らしい顔から自分の名前が呼ばれる度に恍惚感を味わつたものだ。

そんなささやかな幸福が終わつたのはあの日。

非番だった私はいつものように人気のない夕方の図書室を利用して自宅から持つてきた少女小説を読みふけつていた。

クールな印象を持たれている以上、そのイメージを崩すのも気が引けるし何よりこの趣味を誰にも知られたくない以上、この時間帯は最高だつた。だつたのに。

そのとき、私は非常に盛り上がつていた。

様々な邪魔に阻まれつつも、ようやく結ばれようと/or>ヒロイ

ンと青年の場面。

その盛り上がりしている場面を読んでいるときに事件が起きた。いきなり後ろから、

「なーなせーんぱい！」

と静寂な図書館に場違いな高い声が響き渡り、彼の、天使くんの顔がにゅつと出てきたのだ。

私は驚いた。それはもう驚いた。

とつさに奇声とともに彼の顔面に読んでいた小説を投げつけてしま

い、気づいたときは後の祭り。

誰もいないと高を括っていたのがいけなかつた。カバーもつけていないピンクの物体が彼の手元に。よりによつてタイトルが『シンデレラのようなラヴ・ストーリー』。恥ずかしい。誰だつて見ればすぐわかるような少女小説のタイトル。

彼は睡然としていた。驚愕に近いような表情だつた。ああ、泣き出しそうな顔をして。

まさか…クールなイメージな先輩がこんな少女趣味があつたとは思わなかつたのだろう。

その後、彼は必死に謝つていたが、謝りたかったのはこちらの方だ。纖細な彼の心を傷つけてしまつた。

それなのに彼は優しかつた。私の趣味に対して何一つ聞かずに去つてくれた。

ああ、天使くん、君は本物の天使くんだつたのだね…と、その事件の翌日、もつと言えば登校するまで思つていたのだが。

彼に会つた途端、告白された。白いレース柄のピンクの封筒付きで。

……は?

この時点で私の頭脳はめまぐるしく回り始めた。（自慢だが私は頭がいい方だ）

昨日の事件、そして今日の彼の行動…。

天使くん、私に対してクールなイメージを持っている　昨日、私の少女趣味を発見する　そして今、告白とピンクの封筒。しかも公衆の面前。

そして一つの結果に行き着いた。

つまり。つまり、だ。

彼は私のクールなイメージを逆手にとつて、昨日の少女趣味をからかいにきたのかつ！

だからわざわざ公衆の面前で、しかもぴ、ピンクの封筒付きで告白したのかつ。

この瞬間、彼の天使像が破壊され、ついでに私の彼に対する優しい感情も崩壊した。

そして、植えつけられたのは憎悪。

許せない。乙女の夢を踏みにじったその行為、断じて許せん。
そして、牽制の意味として取つてもらえるよう封筒を真つ二つに破り捨て、「嫌いです」と応えた。

奴の行動は許しがたかつたが、これでもうこんなことはしないだろうと思っていた。のに。

次の日、ピンク一面の花束を抱えながら告白された。

また次の日、某少女漫画のヒーローの台詞を引用したようなやたら恥ずかしい台詞で告白された。

またまた次の日、ピンクのクリームで『LOVE』とかかれた1ホールのチョコレートケーキを贈られた。

またまたまた次の日、下駄箱にピンクの封筒が入っていた。薄く香水がついている。差出人は奴。内容は「すきです」
またまたまたまた…疲れた。

とにかく、終わりと思っていたのが、何故か、毎日、告白されるようになってしまった。

こんなに粘着質な奴だとは思わず、からかいの為だけに手の込んだマネをと最初のうちはそれら全てを一瞬で粉碎し続けていたのだが。

最近になつて（ようやく）疑問に思い始めた。

毎回手の込んだ贈り物と共に20数回も告白し続けるだなんて、純情な少年そのものじゃないのか。

最初の告白こそからかいだと判断して切り捨てたが、あれこそが間違いだったのでは、と思うようになつてきたのだ。そして、彼のあの真剣な瞳。

返事を返すたびに彼の表情が傷ついたように見えるのにも、それを見て少し傷ついている自分の心にも気が付き始めた。彼に会う度に高鳴る鼓動も。

しかし、解せない。

もし彼の告白が本気だとしても、何のとりえも無い私にどんな魅力があるのだろう。

彼は、目が可笑しいのかも知れない。

私よりもお似合いの子が他にいるのではないか。

そうだ。

彼の申し出の真偽は定かではないが、せめて誤った道に進まぬためにも、ここは断固として固辞しようではないか！

そう考えたとき、胸が締め付けられた気がしたが、なに、胸ではなく腹が痛いのだ。昨日の夕飯があたつたのだと考えなおし、これらも続くであろう彼の告白を断り続けようと決意した。彼には悪いが。

それに。

私は恋というものがわからない。
なつたことがないから、わからないと言つしかないのだが。
だから、本当に彼が私を好いているのかどうかもわからない。

だが、もう少し、こうして近くで接してみれば、恋とこうものがわかるかもしれない。彼が本気の恋をしていると、わかるかもしれない。

彼には悪いが、もう少し、この状態を続けてみたいなと思つていいのだ。

だから、今日も彼を振る。
これで終わりにしてくれといつ気持ちと、また明日来て欲しいという気持ち。

矛盾している、この感情。

一体どっちが本当の気持ちなのや？

……それでも、毎度毎度プレゼントされるものが私好みなのだろう。

これはアレか、あの事件の嫌がらせなのか？それとも、彼の趣味なのだろうか…。

自称親友の観察とその分析

「好きです！」

「嫌いです」

おー、相変わらずやつてるなアあの二人見ていて飽きないもんだわ。

よっす、俺の名は柿本 達也。かきもと たつや

みんなからは『たつん』って愛称で呼ばれてるさー。頭がツンツンだからかなつ。ま、いつか。

以後、よろしく！

：で、今の場面は、俺の親友があの『鉄の仮面を持つ女』に告白し、見事に玉砕しているところだな。

こう何回も何回もバリエーションの違う告白はなかなかお目にかかるないな。（しかも毎回公衆の面前でところがまた笑いを誘う）20数回も告白し続けるお前は偉いぞ浩太郎。

だが、相手が悪すぎる。

なんたつて、相手は『彼女』だ。

コウちゃん（浩太郎のことだ）が俺に好きな人を教えてくれた時、中学校から親友を続けてきて、あれほど衝撃的な話はなかった。

どうして彼女なんだ！？というか、どこをどこやって惚れてしまつたんだ！？

と、勢いで言葉責めをしてしまったが、彼は頬を染めつつもじもじしながら「内緒…」と答えやがつた。

そのくせ、「ちよ、それはやめたら…」と言つたら「それはダメっ！」て珍しく怒るし。

それに、そんな可愛い仕草するなよつ男だろー！
と、思わずツツ「ミミたくなつてしまつたが、彼の名誉の為にその言葉を飲み込んだ。

勘違いしてほしくはないけど、俺にホモの氣はまったくない。
むしろ、その言葉を聞いただけで鳥肌が立つてしまつた。

だが、そんな俺でも同姓である「つかやんの顔は可愛い」と思つてしまつ。

男女問わず魅了する顔つてこんなのかなつて思つたぜ。

魅了、と言つより、可愛いとかきゅんときちやうとか、まーつまり、童顔なわけだ。

本人は自分の容姿についてはかなり不満らしこけどさ。

おまけに、彼の物静かな性格も相まって学校じゃアイドル、いや癒し的存在になつていてるのだ。

同級生でも人気の彼だが、噂じやおねーさま方が彼にすぐ執心してゐらしいな。

母性愛をくすぐつそうだもんなあ…。

ヒューワけで、彼は学校じゃ結構有名な奴なんだが（本人は自覚なし）、まさか奴の恋する相手がある意味同じくらい有名な奴だとは…。

春日井 奈々。

俺たちのっこ上の先輩なんだが、こりゃまた有名人なんだわ。

んー、『ウチちゃんは可愛い系と言つない、彼女は真逆の美しさを表した感じ？

流し目と黒子が実にあつてゐる和風美人。あんな綺麗なおねーさんはモテルでも見たことないな。

だがこの美人、色々オマケがついてきて。

不気味、無愛想、無口、オーラが恐い、ヒトセトラヒトセトリ…。

普段あんまり、いや、全然喋らずおまけに表情も動かさい、なのに喋つたと思つたら「何」「え?」「だから?」みたいな一単語ばつかりらしき。

そのために、あの美貌で群れていた野郎共はワケの分からん空恐ろしさで退散し、同姓の女子でさえ恐れるようになり、あの常軌を逸した美貌ゆえその噂は学校中に広まり、そしてついたあだ名が『鉄の仮面を持つ女』。

…ちょっとこの名はどうなんだと思うけど、ほんとにほんと。

実際クラスの連中と噂の君を覗いたとき、「なるほど」と思つたもん。

まったく、表情が崩れん。遠目で見ただけだけど、あれを間近で見る勇気はないぞ俺。

そんな奴が『ウチちゃんの恋のお相手…。

最悪な組み合わせの誕生かもしれん。

ま、この一人がくつつくのはかなり低い確率っぽいけどな。

現場を見る限り、先輩容赦なく『ウチちゃんのこと切り捨てるし。

俺は親友だからな、一応応援としてやります。

それに、『ウチちゃんも頑張つてるんだぜ？

最初に告白して、手酷く振られたつてのに、諦めないで次の日から毎日毎日告白しまくり。

内気で喋るにじが茹出な「ウチやん」があんなに積極的に行動をするのは珍しいもんだ。

告白される先輩ことひやかせたまつもんじやないかもしけんが、報われてほしいと思つ。

だなびや。

「……ドードー、毎回お皿あるじゃんかな手え込んどいたるんだ?」

「え?」

たつたわつまた振られた「ウチやん」は、次なる告白のために早くも準備し始めていた。

や、告白に気合を入れるためにアイテムを使つたりするのにはいいんだと思うんだけど。

「ウチやんは告白の仕方に異常に手を込めてると思つ。

大量の薔薇の花束をわざわざ買ってきたり、手作りのハート型クリキーを焼いてきたり、あ、ケーキを作つてきたこともあつたつけ。結局俺が食べるハメになつたけど。

とにかく、時間をかけて何かしら作つたりしてこる。

「なあ、ビーしてなんだよ」

「うーん、えとね……、めつと彼女はいつものが好きなんじやないかなつて思つて……」

思つて……どーに? みなみ話す「ウチやん」。

でもさ、どう考えたら彼女がそんな可愛らしこものが好きやうなんだと行き着くんだ?

いつも彼女が読んでいる本は、ほとんどが伝記や科学または歴史書

みたいなお堅い読み物ばかりしきんだわ。

何回も断られた原因は「いつものせごじゃないか」と書いたと
つたけど…やめた。

彼女の為に一生懸命「フレター」を書いていたのがやつの邪魔にな
たくないしさ。

けども、何もそんなデラックスの花柄がついてるレターセットじゃ
なくしていいじゃん…。

…まあ、色々とシミたいくらいの満載なのだが、ここは落ち着いて。

彼らの行く末を生暖かく見守ってやるわ。

彼女の妹とその語り

「好きです！」

「嫌いです」

…つたく、いつまでやつてるんだる、あの二人。

あ、ども、はじめまして。

あたしは春日井 実々（みみ）。

ここの中学校ではある意味有名なあの春日井奈々の実の妹。

で、お決まりのこの場面はうちのクラスメイトの天使くんがお姉ちゃんに告つてるところ。

いい加減にしてよーと思つてるんだけど、お姉ちゃんも頑固なんだから。つたく。

この告白シーン、私が見た回数だけでも30は越えてる。
異常すぎない？この回数。

お姉ちゃんも折れてしまえばいいのに、断つてしまのは、…やっぱりあのトラウマなのかなあ。

うちのお姉ちゃん、あの容貌で学校では超無口で無表情だから学校では結構恐れられてるみたいなんだけど、家では別人みたいに話してくれる。

お姉ちゃんは極度の人見知りさん。

姉妹とは思えないくらいの美貌を持ちながら自信を持ってない感じ

消極的だし、話し下手だから他人に誤解をされやすい。

ちなみにあたしは平々凡々な顔立ちで、割と社交的な性分。ここまで似てない姉妹も珍しいとは思つけれど。

だから、『鉄の仮面を持つ女』と言われ始めてから一層そのイメージを崩さないようにしてゐる。

お姉ちゃん、可憐な少女趣味を持つてゐるのを知られたら、また何か言われそうだと思ってるみたいで、あえてその呼び名に合わせて行動してるみたい。まあ、大半は素だらうけど。

あたしが入学した頃にはものすごく有名な呼び名になつてたから、よっぽど徹底してたんだなあ。

あたしから見れば以外な趣味の一つか二つくらい、どうしたことないと思つてるんだよね。

頑固なんだか臆病なんだかわけわかんない。でも、そんな風にギャップのあるお姉ちゃんは嫌いじゃない。むしろ超可愛いのよねえ。

で、そんなお姉ちゃんの極秘趣味を偶然目撃した天使くん。

次の日に告白をしたみたいなんだけど、それをすぐ「イタズラだ!」と受け取っちゃうのはどうかと思うのよね。

確かに、告白だなんてイキナリすぎてびっくりしちゃうのはわかるけど。

でもでも、相手が天使くんなら、イタズラなんてありえない。

天使くんと少しでも話してればわかるもん。

彼、あの超~~~~~可愛い顔を持つてゐるのにひけらかないし、消極的でおどおどしてたりするけど、それでも話してればすぐ良い奴だなって思う。

ほわわんと暖かいキモチになれるんだ。

それに、天使くんつて人当たりは良いけれど、何かに執着を持つて

ないカンジがするの。

だから、彼にアタックしてきたあたしの友達や先輩のお姉さま方は全て玉碎のこと。

ちなみにあたしはもつさつ30代のダンティしか受け付けないので天使くんは対象外。

そんな天使くんが30回も粘つて粘つて粘りまくつてアタックし続けている。

いくら、最初はイタズラだと受け取つたお姉ちゃんでもいい加減気づくと思うのよね。

彼が本気だつてこと。

そうそう。

あまりにも撃沈する天使くんの姿が哀れなもんだから、応援しようじゃないかと思つて恋のキュー・ピッヂの役割をしようと度々天使くんの話を振つてみてるの。彼「こんなとこ」が良いよー素敵だよー落ちちゃえよー、みたいな感じで。

たいていは一蹴されるんだけどね。

この日も、ソファでだらけているお姉ちゃんに似たよつた言葉を投げかけたあたし。

天使くんを応援したいのはやまやまだけど、ほんとに、いい加減決着ついてほしーし。

当初はピリピリしてたお姉ちゃんも最近はそんな気配納まつてきてるし。

だからちょっとカマかけてみたんだ。

「お姉ちゃんわあ、毎回天使くんの告白断つてるナビ、ホントは結構まんざらでもないんでしょー？」

本気半分、冗談半分。

もしお姉ちゃんも天使くんのことを憎からず思つてゐるのに断り続けてゐるのなら、きっと後に引けない頑固さがでてるのかもしないしね。

そしたらさ、どうだつたと思つ?

お姉ちゃん、飲んでた牛乳一気に吹き出してむせてやんの。

ちょっと、さうちに牛乳吹きかけないでよーーと怒鳴つてゐるのに、お姉ちゃん、あたしの声も聞こえないカンジで茫然自失状態。おまけに顔は急に真っ赤つか。

え、なにこの反応。結構いい感じなんじやん。

お姉ちゃん、それを否定するかのように「ち、違うのだぞ我が妹。こ、こここれは…これは、そう、鼻のなかに牛乳が入つてきてだな、私の生命の危機のためあえて見境なく吐き出し生命活動に必要な酸素を沢山取り入れようとして生命活動のために血圧が急上昇してだな…」とものすごーく分かりやすい反応をした姉ちゃん。や、さすがにその説明はキツいよ。しかも言つてること支離滅裂だよ?

…なんだ。

この鈍感な姉でも30回越えればようやく彼の恋心も本気だと気づき始めたのね…というか、昨日とは全く違つたこの反応…何かあつたのかな?

ともあれ、よかつたじやん天使くん。彼の努力も報われそつて何よりだね。

お姉ちゃんも素直じゃないなーとニヤニヤしていたらばれたらしく、「違うと言つとるんじゃボケー!」と、酔だこのよつた顔のまま、あぐああああと奇声を発しながら走り去つてしまつた。牛乳を手にしましたま。

「……の恥ずかしがりやめ。

んー、これじゃあお姉ちゃんが落ちる口も遠くないかもなあ。
紅茶に映った自分のにやけ顔を見ながらそつ思いつつ、優雅にそれを飲み干した。

彼女の妹との語り（後書き）

ようやく補足完了しました。

3・4話だけという、何とも中途半端な載せ方をしてしまつて申し訳ありませんでした。

連載当初から読んでくださった方や、初めて読まれる方にも楽しんで読んでいただけるよう、頑張っていきたいと思います。

彼の念願成就とその行方

「好きです」

「…………え？」

「あ、あれ……？」

「い、いつもの僕の台詞が先輩から発せられてる……って、え、あ、あれ？」

「せせせせ先輩つー？な、奈々先輩！――」

「ん？なに浩太郎」

「あ……嗚呼、久しぶりに僕のことを呼んでくれた先輩。しかも笑顔付き。」

「そろそろ40回を迎えるとしている告白。」

「いきなり先輩から告白されました。」

「こ、これって……せ、先輩つついに僕の気持ちが届いたってことですか！？」

「あ、あの……奈々先輩……」

「だから、なに浩太郎。」

「なにか言いたいことでもあるっていうのか」

「や、それはもういろいろと聞きたいのですが……じゃなくて……せ、先輩、あの、その、う、えーっとですね……も、もう一回……言

つてくれませんか？」

「『ん？なに浩太郎』」

「そこでボケかまさないでくださいっ！」

前っ、その前です！！！」

「好きです」

「ぐはあっ！」

僕はそこで泣き崩れました。号泣です。

うれし泣きってやつです。

だつて…だつてだつて、今まで想い続けてきた先輩の口からそんな言葉を聞けるだなんて！

一瞬信じられずにもう一度聞いてみてよかつた…これは現実なんですね！

嗚呼、最初の頃はラブレターを真つ一つに引き裂かれ、数々のプレゼントと共に散った僕ですが、ついに、ついに春がきましたよ。いやつほい僕！！

そんな感じで完全に舞い上がっていた僕。先輩は少し戸惑いながらも続けて言いました。

「今まで…すまなかつた。

浩太郎を試すようなことをしていたのだ。本当にすまないこととしたと思っていた。けれど、よひやく、自分の気持ちに気が付いたのだ。

お前が、好きなのだと

「な、奈々先輩……」

「大好きなのだ」

う、うわ……ビ、ビビビビビの甘い雰囲気。

今まで味わったことのない甘さです。

あ……先輩がどんどん近づいてくる。「これって、もしかして……？」
もう心臓破裂しそう。足がガクガクして、立つていられない。
め、目伏せなきゃ。えっと……

「奈々先輩……僕も、僕もずっと大好きでし」

「起きやがれ…………！」

…………ハツ！！

あれ、ここ……どこ？

ん、時計……？ 7時30分前。ここは、…………僕の部屋？…………と

言ひつけ……？

ゆ、……夢！？夢なんですか夢オチなんですか……！
え、ちょっとまつて嘘でしょ。

けれど、現実は目の前に。

先輩と思つて抱いていたのは、お気に入りの等身大サイズのウサちゃん。

そして、視線をその先に向ければ僕の姉が。

ようやく、覚醒し始めたとともに、僕の中で色々なものが崩れ始めました。

そ、そんな…先輩の告白全部が嘘だつたなんて…。

「う、嘘だあ…」

「なに泣きそうになつてんのよ。て、うわつなに号泣！？
学校に遅れそつだからつて、せつかくこの姉さまが起こしに来て
やつたのだといつのに。」

そんなんに寝足りなかつたの？つていうか鼻水垂らすなつー涎も拭
く！」

そうじゅない、そうじゅないんです姉さん。
僕の…僕の…

「夢が台無しだ――――！」

「意味わかんないつつうのー！」

ゲンコツをもらつた。

けれど、その痛みより心のほつがダメージ大きすぎます。
今更ですが、よくよく考えてみれば都合の良すぎた展開でした。
先輩が、下の名で呼び捨てで呼ぶなんてことなかつたのに。
笑顔なんて、めつたに見せない人なのに。

色好い返事がもらえないのが続いたからつて、さつと氣弱になつ

ていてあんな夢を見たのですね。反省。

あまりにも都合の良すぎる夢に甘えてしまいました。

改めて先輩への想いを確認する。

そうです。こんなことでへこたれてる暇はありません。
あまりにもあの夢とかけ離れて厳しく辛くても、現実に目をそむけてはいけないです。

それに、厳しいだけじゃない。

最近になつて先輩の態度も柔らかくなつてきた気がします。

僕のこと、少しずつ受け入れてくれたつてことなのでしょうか。

だったら、いいな。

…よし。

あの夢を現実のものにするためにも、今日も頑張っていきましょ

う。

「…つて、あたしを置いてくなーー！」

「はう」

とび蹴り。

…結構かつて感じで締めくくつたのに、姉さんまだいたのですか。

さすがにとび蹴りはないでしょうねー・?

「…たく。

最近、あなたの様子おかしかつたからビーブしたのかなと思つてたのに…その顔見れば大丈夫そうね。

泣き出したかと思えば急に顔赤くなるし。

ふふん、さては好きな女の子のことを考えていたのか

図星。

でも、…」んな暴力的な姉さんでも心配してくれたんですね。

「大丈夫です。僕は復活しました」

これからも想いをぶつけていきます！
ありがとうございます、姉さん。

「けどなあ…あんた、暴走しがちで自爆タイプだし、ほどほどにし
とくのよ」

…少し、感謝したことを見悔す。

ともあれ。

最初に告白したときのような情熱を再び燃え上がらせ、今日も今日
とて先輩への想いを伝えようと頑張ります。

でもせめて、先輩とちゅーするところまで覚めないでほしかったな。
本つ当たり惜しかったのに…！あ、へ、変態じゃないですよ？健全な
男の夢です。

彼の念願成就とその行方（後書き）

時間的には全く進んでません；

ただ、何十回も断られ続ければさすがの彼も弱気になるんじゃないかなーと思って書きました。…若干、違う方向に行ってしましましたが。

彼の想いも再確認したところで、次回辺りは一気に動き出してくれるといいな。つて、私次第ですね…。

たぶん平穀なる日々との崩壊

彼女

今日から6月である。
私が彼の告白を受けて…いや、受け続けて2ヶ月が過ぎようとしている。

日々が過ぎるのはこんなにも早かつただろうか。

毎日が彼の告白とこう奇怪な行動のせいで甘美ぐらしく過ぎていく。

そう、私はまだ彼の告白を受け続けているのだ。

いい加減、この曖昧な関係をハッキリさせようとは思っているのだが、シャイな私は中々素直になれず、つれない態度を取り続いている。

今わかつてきているのは、彼に対する見方がマイナスでなくなつてきているということ。

こんなにも冷たい反応を返しているのに、彼は告白をし続ける。

これはもう、からかいとは程遠く離れた行為だと判断する。納得せざるを得ない。

未だに何故彼のような神々しい存在が地味でちんけな一般人である私に興味を持っているのか疑問に思わずにはいられないのだが。

だがしかし、彼の誠実な想いだと判断したからには、いくら恥ずかしくともそれ相応の答えを返さなくてはならないだらう。もう、逃げられないのだ。向き合はしけない。

つきあつつきあわない云々はおいといへ、…おいといへ、今の私の正直な気持ちを彼に伝えようと思つ。

… じう決意できたのは、まあ、先ほどの妹との会話で自分の気持ちに気づいたからなのだが… 我が妹には言つまつ。

さあ、反撃開始だ。

彼

縁がようじいひやう美しく見える5円が過ぎ、僕の愛すべき季節の一つ、やつ、雨がよく降る6月がやつてきました。

静謐な雰囲気を醸し出す雨。ああ、なんと素敵な時期が来たのでしよう。

毎年この季節になると妙にウキウキになれる僕ですが、今年ばかりはあまり降つてもらいたくないのです。

奈々先輩に告白をし続けてもう2ヶ月が過ぎようとしています。先輩に告白するたびに、僕の気持ちを言葉以外にも実感してもらおうと思つて毎回手づくりのプレゼントを贈つています。

そのプレゼントはどれも繊細に作つたものだから雨に濡れただけですぐグシャグシャになつてしまつのです。

それに…考えすぎかもされませんが、雨が降つていると周りつて見えにくいでじょう?

僕の想いが雨によつて先輩まで届かないかもしれないって思つてしまつのです。

…重症ですよね。
けれど、どうか。

僕の気持ちがハツキリとあの人間に届くよつて、先輩を雨で驚かなければいけない。

(ああ、でも雨さん! 僕は貴方のことが嫌いというわけではないのです! むしろ大好きですよ!! あ、奈々先輩と比べるとやっぱり

先輩の方が…って、ちょっとまって怒らないでください！ただ貴方に嫉妬しているだけなんですからー！

自称親友

俺の愛しの親友は今日も今日とてあの高嶺の花を我がものにしようと頑張っている。

…ほんっとに、よくやるよな。

ま、鉄の仮面の君もまんざらじゃあなぞうだしな。本気でコウちゃんのことが嫌いなら、ここまでこんな茶番付き合ははずがないし。

って、もう6月になるんだなあ。

でも、そろそろ決着つかないとヤバいんじゃないのか？

今まで大人しくしていたみたいだが…ヤツら、コウちゃんのファンはそろそろ堪忍袋の緒が切れそうだぜ？（ファンと言つより親衛隊か）

親友としては、どうフォローに回るかが微妙なところなんだが…これは鉄の仮面の君の妹君にでも頼つてみつかな。クラスメイトだし。うわっ！いい口実つくった俺！

実のところ、あの超絶美人のお姉さんよりも気さくなクラスメイトの妹さんの方が気になるんだよな。

これがきっかけになつて仲良くなれば一石二鳥だぜ。
やるぜ、俺。

妹

…マズいわ。

ヤツら、今の今まで天使くんの愛の行動とお姉ちゃんの様子を黙認してきたみたいだけど（ありえない組み合わせだから大丈夫だと高を括っていたのかしら）…最近、二人の間で少しずつだけピングなオーラが漂い出してきたと察知したみたいね。

ま、この間のお姉ちゃんの反応を見れば、そう遠くない「へんてこつづく」だろうとは思つてはいたのだけど。

女は人の恋には妙に敏感だしね。それに的はある有名な天使くんだし。

でもホント、そろそろだとは思つていたけど行動に出そうね。

さつき話しかけてきたクラスメイト…えっと、なんだっけ…あ、たつりんつて言つてた人（へんなあだ名、にやけ顔がキモかつたわね）、あいつが言つてた通り、ヤツらは我慢の限界かもしれないわ。お姉ちゃんのこと、気にくわない存在だろうしなあ。

自分たちの愛する天使くんがある意味有名なあたしの姉とくつつきそうになつてゐるんだもの。

ハタから見れば毎日ちわげんかしてるみたいなバカッフル同然な感じだし。

あたしでもイラつとくるほどよ。

でも、あたしから見れば、ヤツらの存在自体が気にくわないんだけどね（特にあのエセ嬢様がいるつてこと時点でサイアク）。

…たく。

我が家しの鈍感で恥ずかしがりやのお馬鹿な姉上のためにも人肌脱いでやりたいところなんだけど、はてさて、ヤツらはどう仕掛けてくるのかしら。

ま、あの高飛車馬鹿女が大将なら、ちんけな作戦だろうけど。

受けて立つてやろうじゃないの。姉の恋路を邪魔する者は、馬に蹴られてあたしに殴られるべきなんだから。あー、楽しみつ。

みなさん、「けがんよ」。

6月1日の今日、いつもして朝早くお集まりいただいたのは他でもない、我らが崇高する天使くんの危機が発生しそうだからですわ。皆さんも「察しの通り、そう、あの倅岸不遜でつり田で高慢ちきな鉄仮面女とのことです。

彼女、甚だしくも天使くんを狙つてはいることじやがないですか！

4月の入学式から「愛天使同盟」をつくり、天使くんの快適な生活を作りと日々健気に努力してきたわたくしたちにとつて、あまりに酷くはありませんか。

あの魔女の魔の手から天使くんの純潔を死守するために、一同奮起することを提唱しますわ。はい、皆さん賛成ですね。そうですよね？まさか嫌だとは言いませんみね？

…皆さんがわたくしの意見に同意を示していただけて、わたくし、本当に嬉しいですわ。

それでは改めて。

これから天使くんを悪の道へと行かないよう、我々の手で清く正しい道を歩んでいただけるように一同奮起することを宣誓しますわ。

指揮を取るのは会長であるこのわたくし、あべがわあまいな安部川天利奈でよろしいですわね？

作戦は既に作っておりますわ。

今日の昼休み、調査書通り普段天使くんと魔女の密会場所である中庭の噴水前で待ち伏せし、天使くんが現れる前に魔女を追放するのですわ。ふふ、なんて名案でしょう。さあ、ゆきますわよ！

たぶん平穏なる日々とその崩壊（後書き）

約2週間ぶりの投稿です。…な、難産でした；
最近筆が進まずヤキモキしていたのですが、無事投稿できてよかったです。

波乱前の彼らの様子。でも一番書きたかったのは最後の”ヤツラ”
だったり。

次回でおおいに動いてくれることを願つて。…勝手に暴走しそうで
すが。

段々と佳境に入ってきた模様。

これから無事置んでいけるのかどうか不安ですが、コメディという
ことを忘れないように執筆していきたいと思います。

彼の逃走と彼女の追撃 彼

「ちよ、ちよっと落ち着きましょう奈々先輩つ

「これが落ち着いていられるかーっ！…」

昼休みという貴重な休み時間、僕は愛しの先輩から追われています。

あつれーいつもと逆パターンだぞやつほい。
いつそ先輩に飛びついちゃ…えるわけないじやないですか！！！今
マジで怖いんですよ先輩。何片手にヤカン持ってるんですか殴る気
まんまんですかちよつと…

…あれ。

そもそも、どうして僕は追われるんだっけ？

38

- 5分前 -

決戦の時が、きた。

僕は、今まで背いてきたことを、真正面から向き合おうと決意したのです。

「…とかなんとか言ひちゃって、わつせとお姉ちゃんを落としてく
れればこんな面倒くさいことになんかなかつたわけなの。わか
る、天使くん？」

「…ちよ、ちよっと今かつじよべ決めよつとしていたのに実々ちや
ん！」

「なあにがかつ」によくよ。

30数回も告白し続けて振られてる男に言われたくないわ

「…おいおい実々ちゃん、そりやあ口ウチちゃんが可哀相だぜ。あんなにも情熱的な告白を俺は見たことがないね!」

「うつせこわね、ボンクラ。

そもそもなんであんたが「ここにいるのが意味不明で理解不能なのだけど、オーケー?」

「それはホラ、俺は「ウチちゃんの親友だし当たり前だろ?…」つてい
うか!実々ちゃん俺はボンクラじやなくてたつこんだよ!…」

「フツ」

「…え、なに、今なんか俺笑われた?

「…とか、なにその侮蔑入った笑いは!…」

「え、必死な姿がちょいと哀れに思えただけだよ?」

「そこだけ疑問系かよ!…気になるじゃねえかー!ああでもその笑
顔が可愛いぜこんちくしょー!…」

「ちよ、ちよと落ち着いつけよ!一人ともつ、ね…って、あ…先輩」

6月一日の昼休みの噴水前、の脇の茂みの中。
どうしてこんなところにいるのかと言つと…。

いつも通りに先輩へ愛の告白をしようとして待ち構えていたら、やけにテンションの高い先輩の妹兼クラスメイトの実々ちゃんとたつてんに両脇から捕まえられ、気づいたらここにいた、のかな?…思い

つきつ引き摺られたので記憶が曖昧です。。

と、ともかく、せつかくの先輩への告白タイムが失われると半ば怒って一人に抗議しようとしたら、実々りちゃんの「今日はお姉ちゃんのハートをがっちりつかめるいい案があるんだけどな～」の一言で屈座ることに。

「……でも本当なの実々ちゃん。

先輩もついつい近づいて来てるよー…ま、僕普通に告白すればいいのー?」

「落ち着け天使くん。

まだ我々の姿は見えてないはずなのだよ。」

「…なんかのつてきてるなあ」

「おだまりボンクラ。

…いい、天使くん。今は12時50分。

お姉ちゃんには1~3時に噴水前で待つてついて言つてあるからまだ時間はあるのよ。

で、口からが本題。

…その前に、あなたホントにお姉ちゃんのことが好き?..

「好きです」

「どんなことがあっても?..」

「どんな困難が待ち受けようとも?..」

「どんなことがあっても?..」

「どんな困難が待ち受けようとも?..」

「じ、じょとじこだわ」

「ホント?」?

「はい」

……え、な、なんですかこの問題が。
僕、本当に実々ちゃんと信じてもいい、んだよ、ね……？

「…まあ、今までのキリの実績を見てればわかるんだけじね。一応
よ。

今からやる」とは、天使くん崇拜者がいなくなるようなものだし。
…」の案をやれば、もつチヤホヤされなくなっちゃうかもよ

「実々ちゃん。

僕は、先輩の心をえ僕に向いてくれるなら、悪いけど他の女の子
たちは眼中ないんだ。
だから…だから、」

「あーっ!!

もうわかったよ」「ちちちゃん。どんなことが起つても俺はお前の
味方だ、親友だ!!」

「たつづん……」

「はいはい、二文両用は置いとこで」

「ひでえ……」

「うつせこ。

ま、案つて言つても簡単なことよ。いつも告白をうつしドレンジするだけだし。

天使くん、キミいつも告白するときは『好きです』って言つてプレゼントの類を渡すわよね

「う、うん」

「その台詞を言つ終わつた後の”プレゼント”をキスにすればイチ口だよ、うつと」

「は」

「え」

「え、ええええええええええええええ…？」

あつバカつてたつんの焦つた声が聞こえたような気がしたけど、それどころじやなかつた。叫びましたよ、思い切り。ただだだつて、いきなりちゅ、ちゅーですかっ！？ちゅ、ちゅつとまつて僕と先輩はまだ付き合つてないわけで、でも一番いい案つて実々ちゃん言つてるけどでも僕まだ心の準備がといつよりまだ僕付き合つてないわけで……。

……は。

し、しまつた。大声で叫んでしまいました。と、いつことは。

思わず噴水を見やる。

せ、せせせ先輩こつち見てる―――ちょ、い、いつち来ちゃいますよ――

「あわてないの天使くん。
いい、公衆の面前で堂々とべろちゅーでもかましてやれば、さす
がの取り巻きたちも自然と離れていくつて。それにお姉ちゃんはあ
あ見えてロマンチストだから、キスが一番弱いのよ！」

「ちょっとまつて、わざ今までキスつて…べろ？」

「とりあえずキスよキス！！
あつもうお姉ちゃん来ちゃつたからあたしらは退散するわ。アデ
イオス！」

そんな大胆なことを言つて去らないでください……！
たつづんも、置いていかないで……走つていかないで……！
…あ、先輩が目の前に。

彼の逃走と彼女の追撃　彼（後書き）

…お久しぶりの投稿です。
少し長くなつたのでひとまず区切れます。

彼の逃走と彼女の追撃 彼女

お昼休み、妹の実々からメールで呼び出され噴水前にきたものの妹の姿が見えず、またしても時間破りかとほとほと呆れながら待ちぼうけをくらっていた。

時刻は午後の1時前。

昼休みの真っ只中で、ここの中庭には大勢の生徒で賑わっている。いきなりの呼び出しだったため、先生から管理人へ返却を頼まれたヤカンを手にしたまま待っている姿は少し滑稽ではないかと思いつつも面倒くさいので気にしないことにする。

それにしても、実々は一体何の用事なのだろう。

姉は天使くんへの思いの丈を告げようと一世一代の決心をしつ天使くんが現れるか待ち構えているというのに。

今日こそは、天使くんから言われる前に、私から反撃をしてやるのだ。

そうだ、自分から行かないのはただ恥ずかしいといつわけではなくて相手の不意を突いた作戦なのだ、と心の内で言いながらもつい周りを見てしまう。（彼は突拍子もなく現れるのだ）

見わたすと、前方に見知った顔を見つけた。

アレは…誰だつたか…。

えーと、確か縦巻きくるくるロールで…確かに同じ学年…え、あ

ー、安部、安倍川…？

安部川あまる、あまりー…あま「あべかわあまりな安倍川天利奈ですわ！」

あーそうそう、あまりな。縦巻きロールは覚えていたのに名前を

忘れるとは。

「……て、今なんで私の前に？」

私の心の言葉を見透かしたのか！？と焦ったのだが、違つたようだ。

「先程からお声をかけているのに、無視されるなんて随分お高くてまっていますのね！」

さすがは清らかなる天使くんを惑わす魔女です」と一、「

いや、多少は耳に入つていたのだがどうしても天使くんのことを考えると回りがおろそかになつてしまつようだ。

確か「愛天使同盟」とかいう会の会長らしい。いつのまにこんなファンクラブがとも思つたが、天使くんのために秘密裏に作つてあつたらしい。

……て、魔女呼ばわりか。随分な言われようだ。

気がつけば、天利奈を先頭に約20数名の女子たちが私に向かつて鋭い目を向けている。

鋭い女のカンで言えば…この感情は、敵意。

「その安部川さんが、この私に何の用なのだ」

「貴方もわたくしたちが何をしに貴方の元へやつてきたのかわかっているのではなくて？」

「いや、まったくわからないのだが」

「即答せずに、少しは察してくださいまし！」

いや、そんなことを言われても…と言い訳をしようとしたものの隙を『えず安部川は言い募る。

「良いですか、わたくしたちは天使くんを悪の道へ導かれるのを阻止するためにここへやってきましたのよ。

天使くんの心を尊重し、最初こそはと思い見守っていましたけれど、天使くんの告白回数34回を越した今、貴方方の間でいかがわしいオーラを察知いたしましたの！

わたくしたちが今まで行動を起こさなかつたのは天使くんが安全地帯にいたがため。それを…貴方のような魔女に唆されあげく、まさに毒牙にかかりようとしている彼を、放つておけるのですか！」

「……随分な啖呵をきつたものだな。

だがしかし、私は断じて自分から彼を唆そつとしたことは一度もない！

今から初めて彼を唆そつとしているところだ」

「そう、だから貴方のような方は即刻…………え？
い、今なんておっしゃいましたの？わたくし雑音を聞き逃してしまわれたようなんですが…」

「まったく…毒牙にかかったのは二つの方だといつのに

ボソッと呟いたが聞こえていたようだ。（なんだ、耳が良いほうではないか。）

「ウキヤー」とか「ムキヨー」とか何だかわからんがとりあえず皆して奇声を上げている。…奇妙な光景だ。。

そこにむづひとつ奇声が混じった。

「え、ええええええええええええ！」

……なんとも可愛らしく高い声で叫ぶ者がいるなと振り向いた先には天使君くんが。

何故、道から外れた茂みにしゃがんでいるのかわけがわからんが、まあどうでも……

……待てよ。

もしかして、今会話を聞かれていたのだろうか。

……とこいつとは私の「唆す」発言も……わー！わーーーー！

な、何といふことだらうか。ちゃんとした気持ちを伝えよつと思つていたのに、こんな形で伝わつてしまつなんて。

しかし、よく考えてみればあの姿…まるで隠れてるような体勢じやないか。

まさか、彼は私を待ち伏せしていたのだろうか。そんな考へが浮かんだ途端、急に何故か 悲しいような苦しいような感情が芽生え、それは怒りに変わり、

気がつけば憤然と彼に向かつて走り出していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7292d/>

V S

2011年1月25日22時28分発行